

令和7年度 附属世田谷小学校 学校経営計画

1. 附属学校の役割

- 学部・大学院における研究を附属学校で実際の指導に取り入れ、その結果を学部・大学院の教育研究に反映していく実験・実証校としての役割
- 学部・大学院の教育研究に基づいて、教育実習生を指導する教育実習校としての役割
- 一般公立学校と同様に普通教育を行う公教育の役割
- 地域の学校と連携して教育・研究を推し進める役割

2. 東京学芸大学附属学校の教育目標

東京学芸大学附属学校は、在学する幼児・児童・生徒に普通教育を施すとともに、大学と連携して実証的研究や実践的研究に取り組むことにより、

- 協働して課題を解決する力
- 多様性を尊重する力
- 自己を振り返り、自己を表現する力
- 新しい社会を創造する力

の四つの力を持った次世代の子どもを育成する教育を推進する。

3. 附属世田谷小学校の教育目標

「子どもが、人やもの、こととの豊かなかかわりを通して、自律性と共存性を高め、相互啓発的な生き方を追求していけるようにする」

4. 育てたい児童像

「思いゆたかに 考えふかく とともに生きる子」

○充実した思考力…広い視野に立ち、合理的、創造的に考える子。

○練磨した感受性…人間や自然を深愛し、情操の豊かな子。

◎自覚的な社会連帯性…自他を尊重し、協力して社会を高めていく子。(◎重点)

・自分とは異質な他者であっても、排除することなく、温かいまなざしをもって受け入れることができる子。

・周りの人が嫌な思いをしないかと気にすることができ、嫌な思いをさせないような行動をし、もしさせてしまったら謝って直すことができる子。

○徹底した実践力…心身ともに健全で最後まで頑張りぬく子。

5. 中期経営目標

○ 先端的教育の実証的研究を行う

・これまで培ってきた「相互啓発的な学び」をベースとして行ってきた「学びを自分でデザインする子どもの育成」に関する研究成果を活かし、一般校で実現可能な次世代の学校教育の形を提案する。

6. 年度経営目標

(1) 学校運営の目標:

子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に児童の言動や人間関係を日常的に観察して、よりよく整えられるように努める。また教員は、互いに尊重し合い、協働的に仕事に取り組むよう努める。

(2) 令和7年度重点目標

- ① 世田谷小学校で働く教職員相互の関係を明るく温かなものにすること
- ② 教職員の働き方改革の推進
- ③ いじめ防止対策の充実

詳細は下記に示す通り。

[いじめ防止対策の基盤となる児童育成について]

- 次項(3)教育活動の目標「児童の育成について」にあげるような児童の育成に注力することで、周りの仲間を尊重し温かなまなざしを持って接する子、仲間を活躍させようと考えて誰ひとり置いていかないようにと気遣う子、他者に嫌な思いをさせないように配慮し振る舞える子、を育てる。

このことこそが、世田谷小学校におけるいじめ防止対策の柱となる。

目標のような児童が育てば、「いじめが人として許されない行為であること」「いじめを知って見ぬふりをしないこと」「嫌な思いをしたらためらわず相談できること」などは自ずと実現するはずだと考える。

[いじめへの対処について]

- もし、いじめやいじめが疑われる事案があったときは、大学が定めた「いじめが疑われる事案が発生した場合の基本的対応フロー」に添って速やかに確実に対処する。

[保護者との連携推進について]

- 保護者に向けた定期的講話や情報交換会を開き、「子どもというもの」「子どもとの接し方」「学校の教育方針」について理解してもらうとともに、「家庭と学校との連携」について適切に考えてもらうことを目指す。

(3) 教育活動の目標

- ◎ 児童の育成について

[おりに触れてその都度の丹念な指導を行う]

- 児童が落ち着いて過ごせることを意識して

「思い豊かに考え深くともに生きる子」を目標に、他者との適切な人間関係を持てて、自分のすべきことができて、周りのことも酌み取れて、を目指したい。

- ・ ベースとして、

「おとなしくしていることができる」

「自分の行動や気持ちをコントロールできる」

「人の言うことを聞いてそれに添うことができる」

「他者を尊重し温かな思いで接することができる」ようであって欲しいし、
子どもをそういう状態に整えながら、

「子どもが自由にのびのび取り組み・学ぶ」

「自分の意図でデザインしていくように仕向ける」

「互いに思いや考えを伝え合って理解しあう・協力し合う」ができる様に育てていくと考えたい。

具体的には、

「じっとしていられない」

「黙っていられない」

「自分勝手に行動する」

「興味あることに偏り・限りがある」

「自分のコントロールができない(生活面・感情面)」

「他者に対してネガティブな言動が見られる」

ような場面が見られたら、その都度、丹念に諭し導いていく必要がある。

- ・自由に子ども任せで過ごすことで自然と学んで目標の姿に近づいていく時代ではなくなっている。
身の回りのことなどすべきことや自分の義務を果たさずに、気ままにしているのも、方向が違う。
これまでもそれを気にして指導してきたが、引き続き(よりいっそう)この点を留意していきたい。

- ・R4～R6の教員による取り組みの成果で「落ち着いていられる」「他者を尊重することができる」場面は多くなっており、特にHomeでは適切な人間関係を築けてきている。

廊下・階段で、大声で叫ぶ、奇声を発する、走るはよくなくて、「静々といく」のがよいと教えていく。

(教室でも。仲間に言いたいことがある時に、大声で叫ぶのではなくて、そばまで行って静かに話す。)

(Homeで弱い者に配慮するのと同様、同年齢のクラスメートをも温かな眼差しで受け止め接する。)

- おもにHomeにおける活動を経験する中で、自分とは異なる背景や意見・好みを持つ「異質な他者」に対しても、全ての人が嫌な思いをしないで活躍できるような生活を作れる児童を育てる。

具体的には、次のような意識や行動をできることを目指したい。

- ・周りの仲間を尊重し温かなまなざしを持って接する
- ・仲間を活躍させようと考えて誰ひとり置いていかないようにと気遣う
- ・他のすべての人に嫌な思いをさせないように配慮し振る舞おうとする
- ・他者に嫌な思いをさせる言動があることが望ましくないとする雰囲気を持つ集団を作る
- ・困っている人のことを気にかけて行動を起こす
- ・困ったときには周囲の仲間や大人を頼ることができる

- 「叱る」「指導する」の再考

- ・自由にさせておいて、うそ・裏切りなどの失敗や喧嘩や悪さがあつたときには呼んで指導する・叱る、というやり方は、あまり適切ではない可能性あり。

叱られれば自分で考えて学んでいく時代ではなくなった。

- ・指導される・叱られることにより、指導する人から逃げる・隠すことを覚えるに繋がりやすい。
また、怒らない人や怖くない人には失礼な態度をとる者が出る可能性がある。

- ・何度も情報を伝えて失敗のたびに直して、覚えるまで繰り返す・・・本当にそれでいいかは検討を続ける
- ・家庭での保護者の接し方も点検する必要性あり。

○「ハラスメントのない教育環境を」保つ。

特に、児童が不適切なことをしたからといって、怒鳴ったり力任せに引っ張ったり威圧したりして指導する、という方法は、令和のいま、とらないほうがいいやりかただと考える。

細かかったりくどいようであっても、その都度、望ましい行動を温厚に説いて諭して、子ども自らが適切な行動を選択できるようにする。「叱られてやめる」児童を育てたいわけではない。

子どもに聞いてもらえる関係でいることも大切。

○また、別の観点から、発達・認知の面で心配のある児童には、止め方や伝え方などその特性に合わせて子ども目線で接する・対応する必要がある。クラスに5～6名いる配慮を要する子どもを始めとし、ただ単に、叱る・指導する、命じる、言い含める、約束する、だけでは改善できない場合がある。つい、言えば通じるように思ってしまうが、そうではないことも多いので工夫が必要。

○人の気持ちを感じる練習は大切（皆が心地よくいるためにも）

特にHomeで、だらしない子、自己コントロールができない子、自己主張ができない子、などがいることがあるが、その子に対してネガティブな思いを持ったり意地悪な対応をしたり、暴言・暴力があったり、ということが往々にして起こる。

そういう例が見られたときには、どんな人をも受け入れる、ともに過ごせる、ということに慣れていってもらうための言葉がけ・意識づけが、その都度なされる必要がある。

Homeで適切な行動がとれてきたら、同年齢集団のClassでも、それぞれの考えや志向の違いを踏まえた上で適切に受け止め接することを目指すのが良い。

○対他者の行動について

子どもの自殺が年間500名あるという統計に触れて、「人の痛みがわかる様な子どもに育てたい」とのメッセージが文科省からあった。

「された方の気持ちはどんなものか？」の意識を持てることが必要。相手目線(あなたの目線)を持つ。
→「人より上」になりたい・ならせたい価値観の中で育ってきた子どもが多い現実も踏まえた児童育成。

○「勝ち負けを競わない」のではなくて

「勝ち負けを競わない」のは難しい。なぜなら競争が好きだから。

競争する・競うというのは、勝った結果を得ること(負けた者より上と位置づけること)ではない。

勝ちを目指して挑む過程が面白い、そこが「競う」ことである。

→勝負がついた後の、勝った側・負けた側それぞれの振る舞い方を学ばせることの方が大切。

負けた人を見下ろす、ばかにする、勝ちをひけらかす、勝つために人の足を引っ張る、負けて投げやりになる・潰れる、仕返しする、悪口を言う、人のせいにする、ではなくて、また挑もう・競おうと励まし合うこと、立ち上がること、敗者をも認めること、勝者を称えること、ノーサイドの気持ち、などを持てることが大切。(ドッジボールや走る競争もゲームも百人一首も)

(4)研究活動の目標

文部科学省研究開発学校の指定を受け実施した『「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程の創造』の成果を踏まえて、一般校で応用可能なかたちに適応させることを模索するため、教育課程特例校として引き続き、教科担当制 Class と Home、Laboratory での教育を展開しているが、その課題と成果について、実践に即して知見を積み上げ、よりよい成果を発信できるよう努める。

(5)学生の教育・支援活動の目標

教科担当制と Home 制のもとで受け入れている教育実習において、学生にとってのよりよい学びが得られるような、実習のあり方を探るとともに、次年度以降に向けた提案ができるように努める。

(6)社会的貢献活動の目標

○授業研究の指導、地域・企業との連携、教育・研究成果の執筆、啓蒙的活動、などについて、要請を受けた個々の活動として行う。